6月分市況報告書　　報告者　中島良晴

調査日　群馬県森林組合連合会共販所　6月4日

昨日の冷たい雨とは打って変わって今日は快晴で、土場に駐車した車の温度計は36℃を示している。 並べられた丸太もよく乾いているが、皮の剥け方から昨日までの状態が伺える。 今の季節の丸太は樹皮の下の形成層が厚みを増しているので、雨に濡れるとヌルヌルになる。”滑りやすい”などと言う言葉ではとても間に合わない状態で、ちょうど皮を剝いた長芋と言うのが一番近い状態だ。 山土場では皮の剝け方はさほどでは無いがそれでも近代林業で機械化された作業で生産される丸太は　プロセッサーで擦られ、何度もグラップルで掴まれるうちに樹皮は浮き上がり非常に剥け易くなっている。
さらに市場へ到着するまで、トラックの荷台で擦れて、市場の仕分け作業でで更に樹皮が剝がれる。 皮を剝いたヌルヌルの長芋が大量に積み上がっている様を想像して頂きたい。

つまり何が言いたいかと言えば、素材生産の中で、伐倒以外の作業での危険である。
山土場までの運搬と椪積作業、更に市場に出て市に掛かるまでの作業が1年中で1番危険な状態にある。 市況報告の前段でこれだけの行数を割いて書いたのは、山での作業に普段以上に安全対策に配意して頂きたかったのである。

市の方であるが相変らず出荷は少なく、土場は掃除が行き届いている。
今の時季であるから、さほどに出荷が無くてもこれが通常の状態と言える。
但し　今までの出荷も少なかったので、買い方にはまだ買い気がある。ほとんどの売れた物件には複数枚の応札があるし、価格もそんなには失速していないように見える。
しかし　買い方との会話の中には、もうそろそろ相場が弱くなる傾向が見て取れる。
今回の　7号・14号などは、スギの3.0m　16～18cmの椪であるが、10,000円/㎥を割る札が入っている。 さすがにこれは不落札になっているが「入れてみて反応を見よう」と言う札である。 こういう札がだんだん増えてくると値下がりが始まる。
3.0m材は辛うじて10,000円/㎥台に乗っているが、次回以降は虫害の様子で”応札無し”と言う物件も出てくるだろう。
4.0m材は12,000円/㎥を維持しているが、こちらも虫害が進めば値段どころの話では無くなる
今回面白い現象が見られた。 77号・78号・79号・80号及び86号・87号の6件だが、いずれも瑕疵があり今まで札が入らなかった物件である。 これまでの明細書をさかのぼって見ると、かなり以前から売れ残っている事が判る。 今回これらに多くの札が入った。
77・78号は曲がり材だが　4枚・6枚　と人気が集まり　曲がり材としては普通の　8,680円/㎥で売れている。79・80・86・87号に至っては4枚・5枚と札が入り10,000円/㎥以上で売れている。
永い間売れ残っているという事は、今出ている丸太よりも**伐り旬が良い**という事なのだ。
売れ残っていた物にこれだけの人気が集まるという事は、伐り旬がいかに大切かを物語っている。

今回も椪数は97件と多いが、数量のまとまった椪はそう多くはない。
更に樹種もスギ・ヒノキがほとんどである。 従って買い方の層もあまり幅広くはならない。
今回は、クリ以外の広葉樹も ホウ や ナラ など少し見られた他 カラマツもあった。
広葉樹の多い素生協の市場なら、もう少し売れたかもしれないと思ったが、いかにしても突発的で量も少ないとなると、本格的な値段などは付くものではない。

調査日　素材生産協同組合　6月6日

　こちらの市も出荷の少なさは県森連の市場と同じくらいである。
針葉樹は椪数にして 25件で 明細書のページにすれば1ページ半で収まっている。
とは言え、数量のまとまった椪が多く、材積は 460㎥ 以上あった。
その内スギは 308㎥ 余りヒノキは 116㎥ ほどだ。
市に掛かっている中で、若番の201号～204号までは例によって万年残留物件である。
この様な品揃えは　売る側にしては大変やりやすい形である。
材積はそこそこあるが、椪数を少なくまとめておけば短期間で売り払いがし易く、買い方も
とりあえず材積を確保しやすい。　とりわけ今年は買い方は未だ丸太が欲しそうである。
後は混椪が出来ず、また指値がある役所関係の材だけだが、こちらも件数が少ないので
事前営業をして入札を促したようだ。 事前営業は大切だ。
今は買い方が居るとは言え、さすがに梅雨入りが今日か･明日かと言う時季である。
常連の買い方でも、何軒か札の見えない方もいる。
今回新しく市に掛かった物件の中で唯一の不落札になっている 211号 などは売る側
でも買い方でも、取りこぼしの様である。 結果発表が終わってポッカリと行が白いので
私自身 「何か見落としていたか？」 と思い改めて現物を見直しに行ったが、これと言った
瑕疵がある訳でも無い。 あとは役所の材以外ではめったにない事だが”指値”か？
とも思い、市場に聞いて見ても「そんな事はない。なぜ売れなかったんだろう？」という事だった。
落札者を見ると、この寸法の物件を好んで買っている常連の名前が無い。
すでに、使う分だけを仕入れる”当用買い”に移行している買い方も増えてきたと言う事だろう。
おそらくこの物件は直ぐに電話で再入札してもらって、売れていると思う。
次回に持ち越すメリットは何もない。 一刻も早く売るべきである。
落札価格は、スギの3.0mに関しては前橋よりは少し安い様だ。
それでも スギ3.0m は103㎥ 5件 ほど出荷されており 4.0mの 91㎥ 2件 を上回っている。
ヒノキは秩父の買い方が強い。 素生協の市場から見ると足元を流れる神流川の
向こう岸はもう埼玉県児玉郡なので、秩父は思いの外近いのだ。
　県森連もそうだが、素生協の市場にしても**今は入荷の少なさを気にしていない**。
むしろ ”今の時季は、本来こうあるべきだ。”と思っているくらいで、どちらの市でも少し
「ほっとしている。」と言った所が本音だろう。　　最近の恒例で、毎年この時季は
虫害の進行と競争で丸太を売ると言うのは、本当に神経を削られるものだ。
　今回の市では広葉樹が多く 170椪余りもある。 もっとも広葉樹は1本椪の物件が多く
多くても10本程度なので、材積としては多くはない。
今回は、クリが多かったので111号から142号までは景気よく完売しているが、その前後の
欄はケヤキやその他様々な樹種なので、ページは スカスカ の状態だ。
広葉樹業界では、広葉樹の市場として素生協の市場は評判が良い。掘り出し物も出る。
広葉樹に関しては、今は”素生協の市場に出したクリ”だけが市況を形成するに至っている。
特にケヤキに至っては、さすがの素生協もあたまを抱える。 ケヤキその物に価値がない
訳ではないのだが、価値のあるケヤキは、もう枯渇している様で、何十年も見ていない。
一方で今見られるケヤキは、かつてのケヤキとは全く別物で、どうにも始末に困る代物だ。
今ある使い道は、鉄骨を輸送する時のパッキンくらいだそうで、使い捨てだ。
ケヤキと言うだけで出荷者の期待を背負っている場合が多いが、これほど出荷者の期待と
商品価値が乖離している材も無いと思う。